

その革新性と  
文化的価値を再評価  
その時代の映像文化への接点  
アート・インターネット時  
時代の映像文化への接点

芸術交流共催事業「アンド21」2019年度採択事業

Telexplosion

テレビ

雑誌の形態を借りた映像  
家を中心とする国際的な実験

Telexplosion  
In the Afterglow of TV-land 1980s:  
MTV, JumboTron, INFERRMENTAL

王国の

憂愁 1980s

実験の場となつた  
家庭の映像作品

— MTV、ジャンボトロン、INFERRMENTAL

2020.2.8 (土) 2.9 (日) 2.11 (火・祝)

金沢21世紀美術館 シアター21

主催/キュレーション: 映像ワークショップ (明貴紘子+木村悟之) 共催: 金沢21世紀美術館 協賛: SUEZAN STUDIO  
協力: ゲーテ・インスティテュート東京ドイツ文化センター、カールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター (ZKM)

来のビデオの  
デジタル的的特性が發揮され

実験的でエッジ  
な映像があるから  
インターネット





# 1980年代におけるビデオアートとテレビ Video Art and TV in the 1980s

1980年代は、サイバーパンクと近未来のシンボルとして「トーキョー」が世界から注目され、華やかなバブル経済と通信技術が急進的に発展していく幕開けの時代。それに呼応するかのように、人々はテレビメディアへ期待を寄せ、アーティストはその可能性を追求した。さらに、VHSテープの普及やMTVの開局によって、家庭のテレビ画面に実験的でエンターテインングな映像があふれた時代でもあった。

このようなテレビをめぐる映像作品は、ビデオのメディウムの特性が発揮されているにもかかわらず、その革新性や文化的価値を再評価する機会は限られている。そもそもマスメディア批判から始まったビデオアートだが、1980年代はビデオアートとテレビが近づき、新たな共存関係を築こうとしていたかのようでもある。しかし、その後、インターネットの台頭により、テレビモニターからは実験的で過激な映像は消え去って行く。テレビが映像の実験的舞台となった時代に「テレビ」で見られることを想定して制作された映像作品を振り返り、ポスト・インターネット時代の映像文化への接続について考えてみたい。

\*全てのプログラムの後にポストトークとQ&Aがあります。

The 1980s was the period when Tokyo attracted attention from all over the world as a symbol of cyberpunk and the near future. It was also the period when the bubble economy and communication technology began to develop rapidly. In response to such trends, people placed expectations on TV media and artists pursued its possibilities. Furthermore, the prevalence of VHS and the beginning of Music Television (MTV) prompted the appearance of experimental entertaining visuals on the displays of household TVs.

Although these various video works surrounding televisions demonstrated medium characteristics, its innovative and cultural values have not been well evaluated. Originally, video art started from the perspective of mass media criticism. In the 1980s, video and TV became closer and seemed to establish a new codependent relationship. However, subsequently, experimental and radical images disappeared due to the rise of the Internet.

This video program reviews video works that were produced to be watched on TV displays during the age when TV became a platform for experimental video works. Its purpose is to help us consider how such video works will link to visual culture in the post internet age.

\*After every program we organize a post-talk and Q&A.

## プログラム 1

### テレビ・ハッキング Program 1: Television Hacking

# 2.8(±)

ハッカーがコンピューターへ不正侵入した際に使われるハッキング、という言葉には叩き切るという意味もある。ビデオはそもそもテレビ放送のために開発された規格だが、ビデオアートはテレビとの愛憎関係の歴史ともいえる。1960年代のビデオアート黎明期はテレビを「叩き切ろう」としたことに対して、1980年代はより熟知した上でテレビの電波とモニター画面をしなやかに「ハッキング」しようとした。

Although the term "hacking" is used for unauthorized invasion of computers, it has another meaning of "chop up." Video was developed for telecasting, however, video art has had a love-hate relationship with TV. In the early days of video art in the 60s, it attempted to "chop up" TV. Meanwhile, in the 80s, it attempted to sinuously hack TV waves and monitor displays after becoming knowledgeable about TV.

Program

# 1

#### ① ナムジュン・パイク 《バイ・バイ・キップリング》 1986 / 30'00" / color

Num June Paik, *Bye Bye Kipling*, 1986, 30'00", color

英国の作家キップリングは自身の詩「東と西のバラード」で、両者の隔たりを西欧優位の観点から表現した。それに対して、パイクはそんな時代は終わったと言わんばかりに、韓国、日本、米国を結んだ衛星中継放送を使ったパフォーマンス作品を発表した。前身に米、仏、独を中継した作品《グッド・モーニング、ミスター・オーウェル》(1984)がある。



#### ② 国際ビデオカセットマガジン「INFERMENTAL」東京エディション 《INFERMENTAL 8——テレビ王国の憂愁》(抜粋版)

編集：清恵子 / アルフレッド・バーンバウム 1988 / 60'00" / color

International Magazine on Videocassettes INFERMENTAL Tokyo Edition,  
*INFERMENTAL 8: In the Afterglow of TV-Land (Excerpt)*, 1988, 60'00", color Editor: Keiko Sei, Alfred Birnbaum

「INFERMENTAL (インフェルメンタル)」は、ケーブルテレビや衛星放送など情報インフラへ立ち向かうための手段ではなかった。あくまでもビデオメディアの発展的な拡張を目論んだアート・マガジンで、さまざまなジャンルの映像をテープ空間に併置することによってその時代を映しだそうと試みた。各国で1982年から1991年にかけて全11エディションを発表。



1985年のつくば科学万博は映像博と呼ばれるほど、映像があふれた博覧会だった。ソニーが出品したのは世界最大のデジタルテレビ「ジャンボトロン」。映画スクリーンの進化は止まったけれど、テレビ画面はその後、画面が薄くなり、リアルタイムに双方向通信を可能にするネットワークが背後につながり、急進的に発展していく。このプログラムでは、万博を締めくくった坂本龍一とビデオアーティストらによる、テレビの進化を予見したジャンボトロンのための作品を紹介する。

At Tsukuba EXPO, so many visuals were presented that it could have been called a "visual exposition." Sony exhibited the JumboTron, the world's largest digital display. Although the innovation of movie screens has stopped, TV displays have developed rapidly while becoming slim and linking to a network that enables real time interactive communication. This video program introduces a video work which was produced to be displayed on the JumboTron. It was a forecast of the evolution of TV by Ryuichi Sakamoto and video artists, played at the end of Tsukuba EXPO

Program  
2

① 浅田彰 / RADICAL TV / 坂本龍一

《TV EV Live: TV War》 1985 / 40'00" / color

Akira Asada, RADICAL TV, Ryuichi Sakamoto, TV EV Live: TV War, 1985, 40'00", color

「TV EV」とはTV Evolution (TV進化)の略で、浅田彰によれば、「《TV War》は、このTVエヴォリューション・プロジェクトのファースト・ステージとして遂行される。」とある。それはメディア革命と同列で、そこに映し出される映像は映画やビデオアートではない何かであり、ハードとソフトの関係を無効にするような新しい何かを展望したパフォーマンス作品の記録。

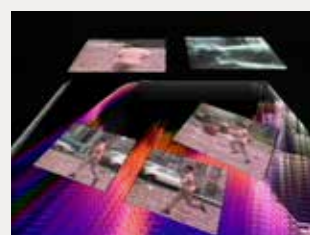


② キット・フィッツジェラルド / ポール・ギャリン / 坂本龍一

《アデリー・ペンギン》 1986 / 33'00" / color

Kit Fitzgerald, Paul Garrin, Ryuichi Sakamoto, Adelic Penguins, 1986, 33'00", color

ギャリンはバイクのアシスタントで、当時、自身の作品制作の傍で商業的なビデオを手がけていた。バイクがビデオテープやテレビ電波に自由を求めたように、ギャリンは後に新たな公共圏を求めてオンライン上に活動領域を広げていく。彼の映像表現であるスタックカートが効いた断片的な映像は、サイバネティックな情報空間を想起させる。



Courtesy: Editions Artshemik (CA), New York

プログラム 3

ドイツからの新しい波

Program 3: New Waves from Germany

2.11 (火・祝)

米国でMTVが開局した1981年に、西ベルリンではディー・テートリッヒェ・ドーリスのメンバーであるヴォルフガング・ミュラーが企画した「天才的ディレタント祭」が開催された。ドイツのポスト・パンクやノイエ・ドイツェ・ヴェレが注目された時代、オルタナティブを志向した彼らもまたビデオメディアとは無関係ではなかった。1980年代にドイツから来日公演し、ミュージック・ビデオというジャンルに取りまきらないアーティストックな映像を制作した3つのバンドを紹介する。

In 1981 when MTV began in the U.S., "Festival der genialen Dillentanten," organized by Wolfgang Müller, a member of Die Tödliche Doris, was held in West Berlin. In an age when post-punk and Neue Deutsche Welle (NDW) was attracting attention in Germany, the band members aimed to create an alternative genre, however they were not irrelevant to video media. This video program introduces three bands that gave public performances in Japan in the 1980s and produced artistic video works, which do not fall under the genre of the music video.

Program  
3-1

① デア・プラン 《JaPlan: ライブ・イン・ジャパン 進化ストリップショー》

監督: ゲルト・シュタイン / モーリッツ・ライヒェルト / ヴォルフガング・ビュールト 1984 / 40'00" / color

Der Plan, Japlan: Live in Japan Evolution Striptease, 1984, 40'00", color Director: Gerd Stein, Moritz Reichelt, and Wolfgang Büld

1970年代にヨーゼフ・ポイスに学んだフェンスターマッハーとライヒェルトは音楽に視覚芸術を持ち込んだアーティストでもある。1984年の来日公演の際に撮影されたパフォーマンス映像が含まれる本作品は、石>植物>虫>突然変異体>ロボット>ヒトへ変化する独自の進化論をコミカルに表現した作品。



Program  
3-2

② ディー・テートリッヒェ・ドーリス

《これがディー・テートリッヒェ・ドーリスだった(1980-1987)》 1988 / 100'00" / Color

Die Tödliche Doris, This was Die Tödliche Doris (1980-1987), 1988, 100'00", color

彼らが来日した1988年にはすでに解散していた。そのため、公演はコンサートではなく「白ワインに成り変わっていたドーリス自身が、過去の自分を演じるシアター」というコンセプトであった。シアターの進行は、明石政紀がつとめた。ミュラーが牽引したダダイスト集団「天才的ディレタント」の実験性が凝縮されたドキュメンタリー映像。



Program  
3-3

③ アインシュテュルツェンデ・ノイバウテン

《1/2 Mensch (半分人間)》 監督: 石井岳龍 1986 60'00" color (\*爆音上映)

Einstürzende Neubauten, 1/2 Mensch, 1986, 60'00", color Director: Gakuryu Ishii

人造人間やサイボーグを連想させるタイトル《半分人間》は、音楽に映像を付けたミュージックビデオではなく、音楽毎のチャプターから構成される一つの芸術作品のようである。廃墟から突然、高層ビルが立ち上がるように、破壊と創成を繰り返すことで生まれる新たな価値感を人間の存在意義にまで踏み込んだ、音響的にも映像的にも詩的な作品。



2.8 (土)	プログラム1 テレビ・ハッキング	2.9 (日)	プログラム2 急進的なテレビ	2.11 (火・祝)	プログラム3 ドイツからの新しい波
13:30-14:00	バイ・バイ・キップリング	13:30-14:10	TV EV Live: TV War	13:00-13:40	プログラム3-1 JaPlan:ライブ・イン・ジャパン 進化ストリップショー
14:00-15:00	INFERMENTAL 8 ——テレビ王国の憂愁	14:10-14:40	アデリー・ペンギン	13:40-14:40	ポストトーク 明石政紀
15:00-16:00	ポストトーク 島敦彦(金沢21世紀美術館館長)×清恵子	14:40-16:00	ポストトーク	15:00-16:30	プログラム3-2 これがディー・テートリッヒェ・ ドーリスだった(1980-1987)
				16:30-17:30	ポストトーク 明石政紀
				18:00-19:00	プログラム3-3 1/2 Mensch(半分人間)
				19:00-20:00	ポストトーク 石井岳龍

〈1プログラム券〉

- ・大人 1500円(当日1800円)
- ・中・高校生 600円(当日1000円)
- ・小学生以下 無料

〈2プログラム券〉

- ・大人 2800円
- ・中・高校生 1000円

〈フリーパス〉

- ・大人 5500円
- ・中・高校生 2500円

チケット取扱い \*前売券の販売は2月7日まで

Web予約: 金沢21世紀美術館ウェブサイト

(チケットは当日受取り)

オンラインチケット: Peatix



清恵子

Sei, Keiko

キュレーター、メディア・アクティビスト、著述家。

1980年代前半にビデオギャラリーSCANのディ

レクターを務めた後、インディペンデント・キュレーターへ。その後共産主義国家のメディア研究のために1988年に東欧に移住。東欧各地のメディア・アクティビストやアーティストたちと民主活動を開始。2002年に活動を東南アジアに移し、ミャンマーでは映画の教育を始め、ワタン映画祭の創設やミャンマー映画の新しい波の台頭に貢献する。



The Media Were with Us:  
The Role of the Television in the  
Romanian Revolution (1990, フグバスト)

明石政紀

Akashi, Masanori

著述家。1981-83年ドイツのロック/ポストパンクの音楽批評、1985-

93年六本木ウェイヴのレコード/CDレーベル「WAVE/eva records」の制作者。以降は著作、翻訳に従事。著書に『ベルリン音楽異聞』(2010)、『キューブリック映画の音楽的世界』(2008)、『ポップ・ミュージックとしてのベートーヴェン』(2002)、『フリッツ・ラング』(2002)、『ドイツのロック音楽』(1997/2003)、『第三帝国と音楽』(1995)ほか。



石井岳龍

Ishii, Gakuryu

映画監督(2010年石井聰互より改名)。1980年代の監督作品に「狂い咲きサンダーロード」(1980)、「SHUFFLE」(1981)、「爆裂都市」(1982)、「アジア

の逆襲」(1983)、「逆噴射家族」(1984)、「指圧王者」(1989)がある。近年の作品に室生犀星の原作「蜜のあわれ」(2016)、「パンク侍、斬られて候」(2018)など。2006年より神戸芸術工科大学 映像表現学科教授。新作映画準備中。



金沢21世紀美術館 シアター21

〒920-8509 石川県金沢市広坂1-2-1

JR金沢駅バスターミナル 兼六園口(東口)

3番、6番乗り場よりバスにて約10分

「広坂・21世紀美術館」にて下車すぐ。

兼六園口8~10番乗り場よりバスにて約10分

「香林坊(アトリオ前)」下車、徒歩約5分。



託児サービス

未就学児の入場はご遠慮願います。館内の託児室をご利用ください。有料・要申込 電話 076-220-2815

上映前後のお楽しみ

シアター21前にて、上映作品に関する資料展示やコーヒーや軽食を販売します。

映像ワークショップ

電話 090-9944-9998  
メール info@eizo.ws  
Facebook: @EizoWorkshop  
Instagram: @eizo\_ws



イベント詳細は金沢21世紀美術館ホームページにて、ご確認ください。